

2021年度出版委員会セミナー報告

萬羽郁子^{1,4)}, 徳村雅弘^{2,4)}, 池田四郎^{3,4)}

¹⁾東京学芸大学教育学部 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
²⁾静岡県立大学食品栄養科学部 〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田52-1
³⁾株式会社ガステック 〒252-1195 神奈川県綾瀬市深谷中8-8-6
⁴⁾一般社団法人室内環境学会出版委員会

Report on the Publication Committee Seminar

Ikuko BAMBA^{1,4)}, Masahiro TOKUMURA^{2,4)}, Shiro IKEDA^{3,4)}

¹⁾ Faculty of Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1, Nukuikita-machi, Koganei-city, Tokyo 184-8501, Japan
²⁾ School of Food and Nutritional Sciences, University of Shizuoka, 52-1 Yada, Suruga-ku, Shizuoka-city, Shizuoka 422-5826, Japan
³⁾ Gastec Corporation, 8-8-6, Fukayanaka, Ayase-city, Kanagawa 252-1195, Japan
⁴⁾ Committee of Publication, SIEJ

1. はじめに

2021年室内環境学会学術大会で出版委員会セミナー「学会誌の飛躍的な質的向上を可能か？」を開催した。本セミナーは、著者および出版委員が学会誌に対する意見交換や査読プロセスについての情報交換を行い、どのようにすれば学会誌の質的向上や満足度向上につながるのか、幅広い示唆を得ることを目的に開催された。当日の参加者は15名で、大学生・大学院生、企業・大学の研究者および実務者、出版委員が参加した。

2. セミナーの内容

日時：2021年12月2日（木）10:00～11:30

会場：C会場

（京都リサーチパーク4号館2階ルーム2）

テーマ：学会誌の飛躍的な質的向上は可能か？

プログラム：

趣旨説明 徳村 雅弘（出版委員会委員長）

話題提供 徳村 雅弘

「室内環境誌の現状と査読状況」

自由討論

ファシリテーター 萬羽 郁子（出版委員会委員）

(1) 話題提供「室内環境誌の現状と査読状況」

徳村雅弘 出版委員会委員長（静岡県立大学）よ

り「室内環境誌の現状と査読状況」について話題提供がされた。機関誌「室内環境」は年3回（4・8・12月）発行され、原著論文以外にも短報、総説、解説、調査資料、技術資料がある。論文の投稿から掲載までのプロセスや、この期間を3か月とすることを目標としていることが示された。

(2) 自由討論

話題提供を受けて、参加者による自由討論が行われた。大学生・大学院生からは論文の構成や長さについての質問があり、投稿規程の確認等を行った。査読者および出版委員経験者より、文献レビューの大切さや、研究目的を明確にすることやストーリー性を持たせることの重要性が述べられ、最初に図表を作成することで文章の筋立てが一貫するなどの具体的な助言もあった。

また、室内環境学会には建築学、理工学、医学、情報科学など多様な分野の研究者・実務者が所属しており、取り上げられる内容も学際的で多岐に渡っている。そのため、各分野の専門用語に頼り過ぎず、室内環境学に関わる多くの研究者にとって分かりやすく、興味を持ってもらえるような内容を意識して欲しい。同様に査読者側も本学会の特徴を理解することの必要性についても議論された。

さらに、論文投稿数を増やすために学生や、企業

*Corresponding author（責任著者） E-mail: ibamba@u-gakugei.ac.jp, Tel: 042-329-7430

の研究者および実務者が投稿しやすい仕組みづくりについて議論した。論文種別の明確化とそれぞれの特徴についての情報発信，学生や実務者の投稿を促すような特集企画の提案，論文執筆をサポートするためのセミナーの開催などについて，引き続き検討していきたい。

3. おわりに

今回，出版委員会としては初めてのセミナー主催であった。参加者からは日頃から抱えていた論文執筆に関する疑問や不安を，査読者や出版委員経験者からは査読を進める上での課題について共有され，それぞれの立場から助言や解決策の提案がなされた。また，本学会や学会誌「室内環境」の特色についてもお互いの想いを共有する機会となった。今後も定期的に意見交換や情報共有の場を持ちながら，出版委員会としても学会誌「室内環境」の質的向上および会員の満足度向上に貢献していきたい。

また，今回のセミナーは準備期間が短く，学会大会ホームページやニューズレター，あるいはポスター

掲示といったセミナーの周知活動が充分に行えなかった点が反省点として残った。事後的にはあるが，セミナー開催の事実をその内容と共に記録することが本報告書を執筆する目的であり，次回開催時に会員諸氏の積極的な出席につなげられれば幸いである。



写真1 出版委員会セミナーの様子